

「あら」と英子は怒りもせず、嫣然他の乗客へ憚るように目を配る。

自分はまた何か物足りない感じがする。今度は英子の膝を枕に半身仰向いた。

直ぐ前には夫婦連の賤くない客が居て、不思議そうに自分等を眺めて、何か囁き合つて居る。

自分は構はねとしても英子は迷惑らしかった。然し英子は自分のなすが儘に任せて居る。いつの間にか汽車は大磯の松原を走つて居る。窓が馬鹿に早かつた。

英子は

「あなた酔つてるのね」と低い聲でしみじみ言ひ出した

「酔つて……あー酔つて居る、誰れがこんなに嫌な酒を飲むようにした、」

「誰れつて？ あなたの心柄だわ、双方の親が許さないものどんなに思つて居ても仕方がないわ……」

「馬鹿ツ眞の戀愛はそんなものじゃない……」

「駄目よあなた（小説家）なぞは口が上手で、思想が變り易くつて、浮草のよう信用できないわ」

「信用出来ないから無断で東京へ行くと言ふのか……」

「さういふ譯じゃないわ、これにはいろ／＼話があるわ、」

「何話がある——話したらいいじゃないか」

「だつてこゝで話せないわ、」

「じゃ僕の降る處へ降るさ、僕今横濱へ行くんだ、」

「いけないわ、電報を打つたら姉が新橋に迎え出てくるわ——」

自分はいつもの室で、度の強い酒をぐひ／＼あほつて浮れるが、今夜はいやに心が滅入つて一滴も飲めなかつた。

すると酒嫌な小菊（藝者）が珍らしく獨りで眞赤になつて、

「お察ししますよ」と唐突に横を向いて言ふ。

「何かお察ししますのだ」と自分は氣乗りもしないが聞いて見る、

「チホ、そんなに眞面目に馬化すものじゃなくつてよ、ホラその雑誌に曰くが……」

「その雑誌——これか」自分は英子に返さず持つて來た、婦人世界を膝の上から執り上げて、

「どこの曰くがあるのだ」と小菊の鼻先へ突き出すと、ぐいと引奪つて、めり／＼と引裂いて、丸めて火鉢へくべる。

と燃へ切れないでむく／＼と赤黒い煙が渦捲いて、焦げ臭い匂ひと一緒に室の外へ、サッ／＼と洩れて行く、

女中はすぐ臭き付けて、驚いて來た。で何か口小言を言ひながら消し止めた。

小菊は其時何故が泣いて居る。

「泣くもんでないよ」と女中が慰めると、

「姉さん口惜しいわ、こんな多情な男じゃないと思つて、心を許して了つたの……」

女中は笑ひながら

「小菊さんそんなに妬かなくつても大丈夫よさつき旦那がね笑談になつしやつたのを、私が根に葉をつけて一寸お前さんに氣を持たして見たのよ……」

「なんなら東京へいらつしやいな、」

「ハ、……汽車の乗り越しが出来るものか、」

「出来るわ、一寸先に断ればいいわ、」

「そんな面倒な事は嫌いだ、」

急にかタガタゴツンと流車が止つた。

驛夫が横濱——横濱——と呼ぶ

自分はまだで彈機にはじかれたように起き上つて、

「英子失敬する——随分御機嫌よう」と言ひしなにさら／＼と鉛筆の走り書きで

戀かれて汝は何處地に新らしき

又の泉を湧すものかや

と皮肉になげ捨てた。それが英子の足許にふら／＼して居る。

英子は何か言いたい風であつたが、乗合の手前遠慮して居るらしい、

自分ばもう喧騒なプラットホームを歩いて居る。

ふと振り返ると、

窓からのり出で居つた英子が、運命の力を恨んだ悲しい切ない目色で、自分を見送つて居るよう見へた

自分は一と思ひに改札口へと向つて歩いた。それもひたひたと込み寄せる佻しい涙を胸に包んで——。

自分は今華やかな電氣をバット浴びて、何處へか坐つて居る。そつた伊勢崎町の大通を横に這入つた、梅の家と言ふ待合の裏坐敷であつた。

「嘘——今夜の鬱ぎようですつかり讀めたの——」

袖を自から放さない。縫れた髪毛も慄へて居る。

自分はず／＼戀の面白い力を、淋しく知つた。

それと同時に「南賣柄にもない初心な」と坐るな同情に、やがて他愛もなく眠りに就いた。

夜は愈々深閑と更けて居る。

「某日——の朝更に酒を呼んでありのままを認む」

●雑吟

武藏、宮内、江、面、庵

蟲なくや油乏しき雨の寮

きり／＼す片しくといふ旅衣

晝の蟲すのこにちきり／＼かな

なくや虫誰戀ふとてか草の間

蟲聞くら陶然として只獨り

はたをおる男裸や瓜を喰ふ

豆を引く女男に競ふなり

手玉石あらあぶなきのきり／＼す

秋立つや女の憂ふ肌の色

蟬黙す神木朽ちて秋近し

●蟲の音

小雨降る雨夜を蟲のしぬび音に

われ戀せよと鳴き沈むかな

むら／＼と戀の思に小さき胸

亂るゝ一夜きりくすなく
燈火にはかなき戀をたくひてし
あたりひそかになきむせふ蟲

若き血のわきかへる夜を心なの
蟲はとのもにあさけりてなく

うらぶれし戀をかこちし枕邊の
蟲よ今宵は聲たてすなけ

枕紙涙にぬらすうき夢の
さむる夜すから蟲のなくなり

一人寢を戀しの文にかこちつゝ
待つ夜枕に蟲のなきよる

●温泉宿より

水上 白江

暑かりし日の殘骸肌寒う
夕月の優しさにこほろぎの秋歎

ギカロンの謎の曲節
甘き香油の匂ひ礎めては、

後膳に響く強き鐘の悲哀を、
慳の葉の力なき舞踏の朽色、

山の街漸くに寂しくなり候。
忘れ得ぬ日、忘れ得ぬ日、

山を下る後姿、帯の結び目。

暑かりし日の殘骸肌寒う、
夕月の優しさにこほろぎの秋歎
我が心いと寂しくなり候。

酒精の媚、ギカロンの謎の苦しみ、
黒髪の薄き香、漂ふが如き惑ひに、
洞なる我が肺をそのかして……

昨日より今日、我が病おこり候。

朝夕を湧き出づる硫黄の嫉妬、
牛乳のコップ投げ打てば庭石に當りて、
碎くる音の心地よさ。

暑かりし日の殘骸……
夕月に秋歎こほろぎの悲しき、
我が血汐灰色となり候。

●白粉の花

同人

胸を刺す秋風とのみ覺えける
白粉の花痛しきかな

ものいはで秋瞑想の野に立てば
我が脚下よりこほろぎ鳴きぬ

●編輯室より

▲文學科講義第一學年及び第二學年は何れもこゝろ一二號にて一先づ終了を告ぐるこゝろなりたり。就ては第二學年未完了のものは此の際完了せしむべきは勿論第一學年の方も大部分は完結せしめ、繼續すべきものは出來得る限り迅速の進行を期しつゝあれば讀者請ふ諒せられよ。

▲次に次號即ち廿四號は舊新學年の交代期なるを以て各學科の完結やら新學年の開始等にて編輯室のみならず印刷會社も非常の繁忙を極め居るか故に、こゝろ一二號は多少所定の發行期日より後るゝやも計られず、これ又豫め讀者の諒せられんことを望む。

▲次に本年は第二學年の卒業試験を早め、卒業試験の成績を最終の廿四號に發表し得るやう前號に稟告し置きしに、中には其稟告を見ざる人もあるやに察せる。かゝる人の爲めに此の際今一回追試験を行ふべければ、至急本出版部へ向け試験の手續きを爲さるべし。

●一筆呈上

堺市櫻之町大道二四 大野 翠峯

殘暑の候校外生諸君御動靜如何却説久しく愛讀致居候、本講義録も最早二三巻と以て完結を相成申候、就ては過去二ヶ年間當俱樂部にて小生淺學非才を顧みず拙悪なるものを投稿せしにも不拘御誘掖御厚情を蒙り小生の光榮之れに不如候、然るに今や本誌と永く別れざるべからざる運命を齎らし來り候されどされど小生如き者と思召さず永劫に御見捨なく御交誼を垂れさせ玉はん事を切に祈る所に候、末筆乍ら時候柄諸君御自愛事一に益々御勉勵あらん事を願上候。

- 御希望の奥附は講義録と他の單行本と紛らしくなりて色々弊害を生ずるにつき従來附し申さず候(編者附記)
- 一 講義完結の場合には各科共別に奥附を添附せられたし
- 一 未掲の芳賀博士の講義を一日も早く掲載せられたし
- 一 藤井學士の道徳原理批判第四十一頁より第五十六頁まで脱落せるに就き送附せられたし 以上

●校外生諸君に告ぐ

僕が這回本講義録の編輯主任となつて、多年其の實力と縦横の才筆とを以て盡碎せられた岡崎密乗君の後を繼ぐ事となつた。が身固より不肖、徒らに衣冠を傳へて本體のこれに添はざるものあるを心私かに慙づる次第である。と愚痴を滾したところで今更詮ない事で、最早此上は死力を盡して事に當るより外に途は無いが、折あしく時偶々、此九月は當講義録の學年末で、而も十月は學年始めだ。將に卒業せむとする諸君と、進級せむとする諸君と、新に入學せむとする諸君とを前に控へて一年中の最多忙期。驚馬益々疲れて鞭聲頻りに鳴る底の感を懐かざるをえない。

第二學年の諸君は嘸試験の準備にお忙はしからう。通じて二年といふ月日はなか／＼短いものではない。一萬頁と口に言へばわけのない事であるが、熟讀玩味の効果は優に師についてうる實質の三ヶ年分はある。これは僕が保證する。ところで今や卒業試験の問題は既に諸君の手に

落ちた事であらうと思ふが、答解は講義のまるうつしを許さぬ今迄にえた實力と、研究法に示した参考書とに準據した該博な知識を以て答へて貰ひたい。畢竟試験といふのは形式で、諸君が攻究の程度如何を見むとする尺度たるに過ぎない。

話は外へそれだが、今もいふ目下は本講義録編輯の一年中の最多忙期なるが上に、僕が就任勿々であるのだから、本號の如く校正の粗漏と雜録欄の不備と發行期日の遅延とは實に已むを得ない結果なのである。が第一學年の諸君、暫く待ち給へ、驚馬大に水飼うて、聽て諸君が研學の驛路に一聲高く嘶かむ。

編輯室にて 石丸無苦記す



雜 録

●年度末の辭

前號に於て諸君に一言し置きたる如く、僕が當講義録の編輯に従事するやうになつてからは日尙淺く、殊に年度末の際であつたからして頗る多忙を極め、爾來營々として大に盡すところあるつもりでありながら萬事思ふに任せず、さうかうするうちには日月懸河の如くに流れ去つて了ふので、所期の半ばをも果さずして今日に至つたのは誠に残念至極の至りです。がこれも實際已むを得ない次第であるから、同情深き諸君の寛恕あらむ事を偏に希望します。

さて、從來第一學年の課程を修めて居られた諸君は正に本號を以て其學年の業を了へ、十月の初號からは第二學年に進級せられるわけで、研磨の功も大に現はれた事であらうと察せられる。が通信教授にあつては、親しく指導し激勵

雜 録

してくれる人のないが爲めに、較ともすると情氣を生じてきて、中廢するか、若しくは講義録は徒らに机上の裝飾となつて了つて、塵埃場裏に煤の色着けをするやうなふしだらを生じ易い傾向がある。まさか諸君にさういふ心配はあるまいが、もしそんなのがありとすれば、其の人の將來や寔に寒心すべき運命を有してをるものと謂はねばならぬ。

該に三つ兒の魂百までといふ事がある。なんて事新らしくいふ迄もない諸君は充分御承知であるが、これは第一義の天性と第二義の天性との恐る可きものなる事を謂つたものと僕は思ふ。無論人によつては、中年乃至晩年に至つて翻然大悟とか心機一轉とか、根本的大改造をなすものが無いではないが、先づ九十九人迄は此の二個の天性の左右するところとなつて、善となり悪となり、勇となり怯となつて一生を終るのである。一事を以て他事が推せる。諸君が今にして、怠惰の故に、壓きたるが故に、困難なるが故に學業を中止する如きことがあつたとすると

諸君の意志の薄弱なる事は明らかに其試金石に
痕跡を留めたのである。終生容易に拭ふべから
ざる汚點を印したものである。番にそればかり
で無く、意志の薄弱は、一事を廢する毎に益々
其度を加へて來て、終に貴重な人間の一生を無
爲無能……ならまだ可いが、果ては社會に害惡
を遺し、一家一門に尠なからぬ耻辱を與へて此
世を去るの不運を見るに至る。意志の力の薄弱
なるほど怖ろしいものはない。一旦決心した事
をやり遂げえられないといふのはそれが爲めで
ある。一事が萬事で、そんな輩には何をやらし
たつても皆中絶で、あれ啄きこれ啄き、所謂心
機一轉の時分には日暮れて途遠し、生きながら
にして中宇に迷ふといふ哀れ至極な境涯に陥る
近い話が、「其人は意志は鞏固ですか」と云ふ事
が需用する社會の一般の叫聲であるのを考へて
見れば解る。

會に撃つて出で、優を世界に争はうといふ人
もあらうが、孰れも等しく心がけてをつて貰ひ
たいのは、常に研究を怠らないやうにして貰ひ
たいことである。親しく師につけば無論朝夕其
指導を受けて、何不自由も感じないわけである
が、獨學自修となると前にいふ怠りがちに傾き
易いが上に、自分は卒業したといふ安心が手傳
つて益々惰ける。それがために日進月歩の世よ
りは日一日と後れてきて、終には不知不識の間
に時代後れの無用物となつて了ふといふのは珍
らしくない。三十歳にして先づ其想をい。三十
五歳にして世之を顧みない底の人の轍を踏むや
うになつてはならぬ。

意志の鞏固といひ、百折不撓といひ、勉勵とい
ひ、固着といふ皆是れ單に卒業證書を握る迄に
必要な素成分ではない。曲折極まり無き世路
に立つて、七轉八起に必要な第二の天性を作
るべき主成分の練磨である事を忘れてはならぬ
諸君請ふ奮勵一番、進むで社會の爲め、乃至天
下國家の爲めに將來大なるに盡すところあらむ

貫ひたい。諸君の將來は、此の試金石に印する
痕跡を見て僕は充分に豫知する事が能きと思
ふのである。

本學年より繼續すべき學科目と、新たに掲載せ
らる可き目録とは本號の巻頭に色紙刷にして附
けて置きました。無論諸君も御承知の事ではあ
るが、念の爲めに添へたのです。講師の執筆の
都合によつて來學年の分を繰上げたものもあり
従つて豫定の課目の全體を本學年の分に掲載し
きれなかつたものもありますが、是非ない儀で
すからは亦御寛恕あらむ事を願ひます。

終りに臨むで卒業生諸君に一言する。諸君は前
に謂ふところ、意志の鞏固な方で、先づ第一回
の試金石に合格したのである。漸く世に處する
に必要な一部の基礎を築き上げたのである。
これは寔に慶す可き事で、將來とても、校外生
として現はしたる此の百折不撓の鞏固なる意志
を以て、世事に當られむ事に切に望むところな
のである。勿論卒業後は進むで尙一層高等なる
學業を修めらるるものもあらうし、或は直に社

が爲めに益々健在なれ。これをこれ明治四十二
年度末終刊の辭となす。

(無 苦 生)



●中學校長の銅像

長野縣松本中學校長小林有也氏は在職二十五年の勤績者として、全國に於る有数の老教育家なるが、氏の薰陶を受けたる朝野の名士、博士、學士、學生一千餘名は、去る一日同校に於て氏の頌徳祝賀會を、二日其の同窓懇話會を開き、同時に同氏の銅像除幕式を舉行したるが、同氏が就職以來同校卒業生の數を聞くに、實に一千一百十七名の多きに上り、内博士四名あり。即ち

- 東京帝大法科教授 法學博士 加藤 正 治
- 京都大學工科教授 工學博士 青 柳 榮 司
- 仙臺高等工業學校 工學博士 隆 矢 斧 司
- 東京帝大農科教授 農學博士 高 橋 偵 造

氏等にして、外に門下生として法學博士高橋作衛氏あり。學士に至つては九十名の多きに上れり。尙又昨年九月の調査に據れば、貴族院議員一人、(並木和一氏)大學又は高等學校教授九一官吏五十三、技師二十二、陸海軍人三十九名、中等程度學校長及び教授五十六名、病院長及び醫員六十三名、小學校長及び教員八十七、官吏十四、辯護士五、農業者二十五、商業八十六、其の他の業務四十三、海外渡航者五十三、日露戰死者二十名等に分れ居れりと。斯の如く移々たる良材を出せしは、長野縣の榮と謂ふべきなり。

●中等教員と文學士

本年度文科大學卒業者の就職に關し、爾來同大學當事者は勿論、文部當局に於ても夫々交渉を重ねしも、中等教育方面に於ける需用は殆んど絶無の姿にて、卒業者の九割五分内外は今尙ほ無職なるが、過日全國中學校長會議に際し、文大當事者交渉に對する各校長の意見大要は左の如くなりし。

- (一)帝大出身者は中學校の教頭若しくは次席教師を望むも、同位置には空席少し
- (二)經費の都合上、中學關係者は比較的締給なる學士以外の有資格者を得んとする傾あり
- (三)帝國出身者は餘りに専門的に傾き中等教員なるに適せず

●校舍建築に關する訓令

四日文部省訓令第十一號を以て、左の訓令を道廳及び各地方長官に發せらる。

學校教育の要は其の内容に在りて外觀に存せず。故に校舍は實朴堅牢を旨とし、必ずしも體裁の完美なることを要せず。特に戊申詔書の模倣せられし以來、教育の局に當る者は善く 聖旨を奉戴して力を之が實行に盡しつゝあるは、本大臣の信じて疑はざる所なりと雖も、義務教育年限の延長と、學齡兒童數の増

文相は別項の學校設備に關する訓令について左の如く語れり

加とに伴ひ、各地に於て校舍の建築を要すること多き今日に方りては、特に意を用ひ、學校の施設をして土地の情況と民力の程度とに適應せしめんことを要す。顧ふに曾て學校設備準則の規定せられし以來、往々一律の校舍を造る弊を生じ、其後該規程は改正せられたるも、其の餘風は延いて今日に及び、校舍建築の際、或は土地の情況と資力の如何とを顧みず、一様の設計に依りて之を經營せんとするもの之なきに非ざるが如し。斯の如きは、華を去り實に就く所以の道にあらざるが故に、宜しく土地の情況を參酌して、常に實用を主とし、努めて地方の民力に伴はしめんことを期せらるべし。

特に實業學校に在りては、一層實用を旨として、實地練習に要する工場發達室其他各種の設備の如きも之を施設するに當りて、豫め善く當該地方に於ける實業の狀態を斟酌して、實際に適切ならしめ、生徒が卒業の後に於て、之を實施することを得べき範圍に於て、成るべく其の施設を簡易にし、應用を適實にし、徒に理想上の完全を求めて却て實用迂遠なるが如き弊害に陥ること勿らしむる様一層注意せらるべし。

實業補習學校等に至りては、出來得る限り新に經費を要する施設を避け、専ら現存せる各學校の設備を利用する等、最も簡易なる方法に依りて、教育の普及を圖らしむる様指導監督其查しきを得んとを努めらるべし。

明治四十二年九月四日

文部大臣 小松原英太郎

●文相の校舍談

其節約したる所を以て内容の改良に力を盡し、或は教員を善く

し、或は教授上の必要を充たすやうにせば、戊申詔書の御趣旨にも副ひ、且健實なる教風を起すを得ん云々。

◎阿教信者となりし宗伯

基督教を學んで未だ安心を得ず。佛教各宗の教義を叩き、一時禪學に精神の修養を爲しつゝありて、遂には漢唐の古書を漁り仙術までも研究したる伯爵宗重望氏は、此程日白臺に阿吽鉢囉婆を二回程訪問し、其教理を賞問せるが、此上もなき宗教なりと賞賛し、忽ち結縁して、遂に去る四日入會式を行ひたりと云ふ。

◎美術界

▲文部省展覧會と彫塑 本年の同展覧會に出品せらるべき彫塑は其數頗る多く、而かも六七尺の大作少からず。新海竹太郎氏の原人北村四海氏の眞間手古那、朝倉文夫氏の山男、藤井浩祐氏の疲勞等の外重なるものは毛利教武氏の柳の精靈、石川確治氏の裸體美人、萩原守衛氏の勞働者、悲哀、沼田一雅氏の畫家外一點、米原雲海氏の宗教家等にして其他尙美術學校生徒、太平洋畫會研究所員にして、尙ほ製作中のものも少からずと。

▲漆工競技會の開設 日本漆工會の第九次漆工競技會は、去る十月十日より十一月十九日までの由にて、上野竹の臺陳列館に開催しつゝあるが、出品の種類、區別は、

- 第一區 (一類) 蒔繪、(二類) 塗物、堆朱、堆黑、(三類) 圖案、(四類) 木地、金粉、金貝、螺甸、繪具等の資料刷毛筆等の用具
- 第二區 (一類) 生漆、(二類) 製漆、(三類) 漆苗、漆種

だ(收説題)▲徳田秋江氏、無名通信に評論を寄稿した。本月十五日の誌上に出る(ふれ窩)▲文學士若月紫蘭氏はアナトール、フランスの短篇を譯して集めたる「眞珠貝」を近々三教書院より出版する由(風聞子)。(國民風聞録)

◎文部留學生決定

今回左の二氏文部省海外留學生を命ぜらる。

京都帝國大學法科大學助教授 佐々木惣一

行政法研究の爲め滿三ヶ年間獨、佛及英國に留學を命ず。

京都帝國大學文科大學助教授 朝永三十郎

西洋哲學史研究の爲め滿三ヶ年間獨、佛及英國に留學を命ず。

◎帝國劇場の構造

去四十年來株式會社を組織し、四十一年一月起工したる丸の内帝國劇場は、工事一切を横川民輔氏請負ひ、昨今漸く其半を終りたるが、建物は間口は十七間餘、中央部は二十五間餘、奥行三十三間餘、建坪六百三十坪、高さ前部五十七尺、後部六十六尺、階數は三層、地下室附にして、使用する鐵材は凡て英國アラスコイーなるブランドナー商會より購入し、其額七百噸に及び、石材は茨城縣の稲田より、煉瓦は百八十萬本を東京煉瓦株式會社より購入し、木材としては、或小部分の床だけに用ひ、屋根は銅、亜鉛、スレートを用ひて、最も完全に、模範的に、竣工すべき筈にて、目下は骨組は仕上り、外部を包む煉瓦を取り付け中なるが、全部の落成は明年末頃ならんと云ふ。

◎大師號下賜

にして、尙參考の爲め漆工に關する諸種の古物を出陳し、十一月五日褒賞贈與式を執行すべく、場内には例に依り即賢部をも設くる由なり。▲日本漆工會常會は、去る十五日午後二時より淺草藏前高等工業學校内藏前俱樂部に催し、正田桂太郎氏(歐米に於て家具什器等に塗料を施す方法)戸川殘化氏(源氏物語に就て)の講話並に討論(蒔繪生徒養成法)ありたる筈。

◎全國小學校兒童數

來る四十三年度に於て供給すべき教科書の概數を定むる爲め、文部省は曩に各地方長官に通牒して、本年四月末日現在の小學校兒童數を調査せしめたるに、北海道、東京、千葉、奈良、鳥取、徳島の一廳一府四縣の未着を除き、尋常科兒童五百八十五萬三千六百五十四人、高等科兒童五十九萬四千七百九十九人、合計六百四十四萬八千四百五十三人なりしと。猶未着の分を合すれば、總計略七百三十四萬餘に至るべしとの事なり。

◎文士の風聞

▲死んだ齋藤野の人は、風葉の「天才」の主人公であつたのだ(草蛇耶)▲内田魯庵氏は「復活」後篇後正(約三分の一校了)の傍、「罪と罰」の新譯に着手した。(ストイスキー)▲夏目漱石氏は年收三千六百圓あるの、眞山青果氏が千九百圓だのといつてゐるが、恐らく文壇で最高の收入のある人は巖谷小波氏であらう。博文館の月給が百五十圓、文部省から八十圓、早稻田大學からも幾らかはひる、それにお伽噺(これは別に原稿料が取れるのださうな)の方からの収入が莫大なものであらうといふと

東宮殿下北陸御發輿に先ち、能登の曹洞宗大本山惣持寺開祖瑩山禪師は、八日左の如く大師號を贈諡せられたり。

諡常濟大師

弘徳圓明國師

右に付管長石川素童師は、午前十一時三十分、宮内省に出頭し岩倉宮相より繪旨を拜受したり。

◎文部訓令の亂發

小松原文相就職以來省令、訓令の發せられたるもの二三にして止まらず。今又た學校設備に關する件、學生飲酒取締に關する件等類々として發せらる。文部省は一片の訓令を以て能く教育の好果を收め得べしと思惟する乎。教育の事たる斯く單純なるものにあらず。特に訓育に就ては職員一致實踐躬行他の師表となるべく、是れ勉めて學生子弟を誘導啓發すべきものにして、官廳事務の如く、一片の命令により、下級吏員の事務進捗を計ると同視すべからざるものあり。曩には小學校令の一部を改正して、二重學年の開設を獎勵し、今又を戊申詔書の御趣旨なりとて學校の設備は總て消極的にすべしと訓示す。教育者其適從する處を知るに由なし。特に文部省の訓令あるや地方官は更に自己の意思を添付し、郡町村又た之に添付するが故に、學校へ到達する迄には十數葉の訓令となる。されば中小學の教師等が一々讀了して得る處开も幾何ぞ。現んや亂發の結果は、教育者をして訓令に馴れ、訓令亦形式のみに流るゝに至るべし。とは是れ昨今教育界に於ける非難の聲なりと云ふ。

◎獎學金と其情弊

佛人カーン氏より東京帝國大學へ寄贈せる奨學金は、(一)各國民の思想感情を疏通融和して、戦争を未發に防ぎ、世界の平和維持に貢獻する所あらしめんが爲め、毎年二名宛海外に派遣せられたきこと。(二)右派遣者は國際公法、社會學、宗教學等を專攻せる學者にして、東京帝大教授、講師學生の中より選拔せられたきことの二大要件を附せられたるものなれば、獨り教授のみ恩典に與るべき性質のものにあらず。然るに昨年は高橋、姉崎の二博士、今年に高野法博、建部文博の二氏派遣せられ、未だ講師學生の一人だも派遣せざる有様なるが、斯の如きは實に處置の不公平なるのみならず、カーン氏の本意にも背くものなりとなし、明年は是非共此弊を破らんとて目下一部の間に談合せられつゝあるかし。

●感すべき女教員

神奈川縣にては、七月二十三日より九月五日まで、師範學校及び各中學校にて小學校教員の學力補充講習會を開始し、五日終了證書授與式を舉行したるが、受験者六百四十名の内、最も優秀なりしは第二小田原尋常小學校訓導大久保ハナ子(二十二)と稱び、小田原新玉町二の四〇五の産れにして、幼少より讀み書きを好み、小學校入學以來常に首席を占め、其後師範學校の尋常正教員第七回講習會に入り、首席を以て卒業したるよしなるが、今回の講習會にても亦最優等の成績を占めたるなりと。

●歐化せる求婚廣告

近着の莫斯科發行のランニエニ。ウツロと云ふ新聞に、「日本の

地方長官に訓令相成候處貴校に於ても生徒訓育上右御参考の上相當御注意相成度依命此段及通牒候也

●松村局長の通牒

松村普通學務局長は、校舍建築に關する文相の訓令に基き、九日付を以て、十日左の通牒を各府縣知事へ宛發送したり。

今般訓令第十一號を以て學校の建築及設備に關し訓令相成候處校舍の建築に就ては教授上衛生上適當の注意を要するは勿論の義に付經費の許す範圍に於て相當施設相成度候尙本年二月御参考のため配布し候學校建築計圖案は其凡例に記載せるが如く單に一二の事例を示したるものに有之候へば町村に於て工事實施の際には能く實際の事情に適當する様取捨採擇其宜しきを得せしむることに御配慮相成度依命此段及通牒候也

●學生禁酒令の趣旨

文部大臣が學生の飲酒取締に關する訓令を發したるについて、當局者の語る處によれば、該訓令は別に意味あるにあらず、夫の未成年者飲酒禁止法案が、從來屢次衆議院を通過したるも、貴族院にて成立せざるは、何人も法案の精神には賛成なれども實行上困難なるを以てなり。されば文部省にては夙に之を取締りに注意せるも、訓育の事は學校と家庭との聯絡を圖り、以て其成績を擧げざるべからざるを以て、此際更に一層其聯絡を固うし、訓育上より禁酒の目的を達せんとする趣旨に外ならずと

女子は如何にして男子を釣るか」と云ふ題で、横濱あたりのハイカラ娘の求婚廣告文が何かを麗々しく掲げて居る。何うせ可い加減の記事には相違なからうが、何のかんのいるし、の理窟を並べた末で、其例として次のやうな廣告文例が載つて居る

「私はうら若い美人です。肩は櫻の花の如く美しく、顔は朝の息吹のそれに似て、軀幹は若い胡桃のやうです。眼は又となく艶に涼しく其輝きは磨かれたる樹の如く、閉づる際は卵形の二重瞼です。手の美しさは花の色にも譲らず、肉體は山の端出でし月よりも清らかで、手と蹠とは横濱中で一番繊細に出來て居ます。爪は靜かな時の海面のやうに輝いて居ます。其上私は良人の幸福を願ひ、一生良人の手足と爲つて働かんことを願ひ、良人を自分の主人と仰ぎます。そして私は又胡蝶の花に於けるが如く、常に良人の御機嫌を伺ひ、彼の前に彼の最も愛する歌を歌ひ、歌ひ終る毎に必らず彼の眼を接吻したいと思ひます」。

●岡田次官の通牒

岡田文部次官は、文相の學生飲酒取締に關する訓令に基き、十日左の通牒を大學總長及び各直轄學校長へ宛て發送したり。

今般文部省令第十二號を以て學校生徒の飲酒取締方に關し

いへり。

●教育基金の補填決す

小學校教育基金五十萬圓は、其後中絶削除の儘なりしが、財政計畫の都合は、頃者之が復活を可能とするものあるに依り文部省は明年度豫算に、全額五十萬圓を計上加算したれば、四十三年度以降に於ける全國小學校は、普く均霑して教育上裨益する所尠からざるべしと。

●幸田嬢の休職

下田歌子盛名一時を空うせしも、其終をよとする能はず。今又東京音楽學校教授幸田嬢の休職の報を聞く。世論の真相は之を知らずと雖も、婦人の名を成す者前後皆此の如くなるは、將來大ぬに發展せんとする女性の爲めに歎すべきことなり。

●第二十三回中等教員檢定豫備試験問題 (國語及漢文科)

〔解釋〕(第一種受験者)

(一) 承平の將門天慶の純友康和の義親いづれも皆猛かりけれど宣旨にはかたざりき保元二崇徳院の世をみだり給ひしに故院の御位にてうち勝ち給ひしかば天照す御神もみすそ川の同じ流と申しながらなほ時のみかどをまもり給はする事は強きなめりとぞ古き人々も聞えし又信賴の衛門督おほけなく二條院をおびやかし奉りしも遂に空しきかばねをぞ道のほとりに捨てられけるか、いればふりにし事を思ふにもなほさりとはいかでか上皇今上あまたおはします王城

のいたづらに亡ぶるややはあらむとたのもしくこそおぼ
えしにかくいとあやなきわざの出で來ぬるはこの世一つの
事にもあらざめども迷のおるかなるまへにはなほいとあや
しかし(増鏡)

(二) ほとくす聲もきこえず山彦は外になくねをこたへや
はせぬ(古今集)へだてゆく世々のおもかげかきくらし雪と
ふりぬる年のくれかな(新古今集)

注意 問題毎に毛筆にて別紙に認むべし

〔解釋及訓點〕(第一種受験者共通の分)

(三) 宰我子貢有若智足以知聖人汗不至阿其所好宰我曰以予
觀於夫子賢於堯舜遠矣子貢曰見其禮而知其政聞其樂而知其
德由百世之後等百世之王莫之能違也自生民以來未有夫子也
有若曰豈惟民哉麒麟之於走獸鳳凰之於飛鳥泰山之於丘垤河
海之於行潦類也聖人之於民亦類也出於其類拔乎其萃自生民
以來未有盛於孔子也(孟子)

注意 本紙に句讀返り點送り假名を施し別紙に解釋をな
すべし

〔解釋及訓點〕 第一種受験者の分

(四) 灌夫爲人剛直使酒不好面諛實感諸有勢在己之右不欲加
禮必陵之諸士在己之左愈貧賤尤益敬與鈞稠人廣衆薦寵下輩
士亦以此多之夫不喜文學好任俠以然諸諸所與交通無非豪傑
大猾家累數千萬食客日數十百人陂池田園宗族賓客爲權利橫
於潁川兒乃歌之曰潁水濁灌氏寧潁水濁灌氏族灌夫家居雖當

(五) 寄令孤郎中

李商隱

嵩壽秦樹久離居雙鯉迢々一紙書休問梁園舊賓客茂陵秋雨病
相如

注意 本紙に句讀返り點送り假名を施し別紙に解釋をな
すべし

右五問題を通じて四時間とす

(以上八月二十四日執行)

〔設問〕

- (一) 左ノ語ヲ説明セヨ
衣冠、束帶、宰相、相國、公卿、公家
宣旨、令旨、堂上、地下
- (二) 本居宣長ノ學問上ニ於ル事蹟ヲ叙セヨ
- (三) 左ノ文ヲ文章法ノ上ヨリ解剖セヨ
さしたる事なくて人のかり行くはよからぬ事なり
用ありて行きたりとも其事はてなばとかくかへるべし
久しく居たるいとむつかし
- (四) 左ノ書ニツキテ知レル所ヲ記セ
文心彫龍 通鑑綱目

〔作文〕

- (一) 普通文
公德
- (二) 國文漢譯
日本に鐵道の通じたのは明治五年に東京と横濱との間に

雜錄

然失勢獨相侍中賓客益衰及魏具侯失勢亦欲倚灌夫引繩批根
生平慕之後棄之者灌夫亦倚魏其而通列侯宗室爲名高兩人相
爲引重其游如父子然相得驢其無厭恨相知晚也(史記)

注意 本紙に句讀返り點送り假名を施し——線の句は別
紙に解釋すべし

〔解釋及訓點〕 第二種受験者の分

(四) 貞元十年陸贄罷十一年貶贄思州別駕自奉天以來宣力最
多隨事論諫割切百奏帝追仇盡言又被譴故貶初夏縣陽城以處
士微爲諫議大夫皆想望風采在職七年而不諫韓愈作爭臣論諷
至是判度支裴延齡譴城率諸諫官守闕論延齡姦佞贄無罪時朝
野夕且相延齡城曰脫以延齡爲相當取白麻壞之慟哭於家庭遂沮
城左遷國子司業後又貶道州刺史治民如治家自書其考曰撫字
心勞催科政拙考下(十八史略)

注意 本紙に句讀返り點送り假名を施し——線の句は別
紙に解釋すべし

〔解釋及訓點〕 第一種受験者の分

(五) 酌酒與裴迪
酌酒與君君自寬人情翻覆似波瀾相看相猶按劍朱門光達笑
彈冠紳衿全機袖雨濕花枝欲動春風寒世事浮雲何足問不知高
臥且加餐

注意 本紙に句讀返り點送り假名を施し別紙に解釋をな
すべし

〔解釋及訓點〕 第二種受験者の分

通じたのが一ばんはじめであるそれからおひ／＼諸方に
通じて今では遠方へ行くにも汽車乗れば早くて便利で昔
の遅くて不便であつたことは汽車の中の笑話になつて居
る

注意 設問及作文ヲ通シテ四時間トス
答案ハ問題毎ニ毛筆ニテ別紙ニ認ムベシ

第二種ノ受験者ハ作文第二ニ答フルヲ要セズ

(以上八月二十五日執行)

右擬答は来る初號に掲ぐ。

◎同 修身科

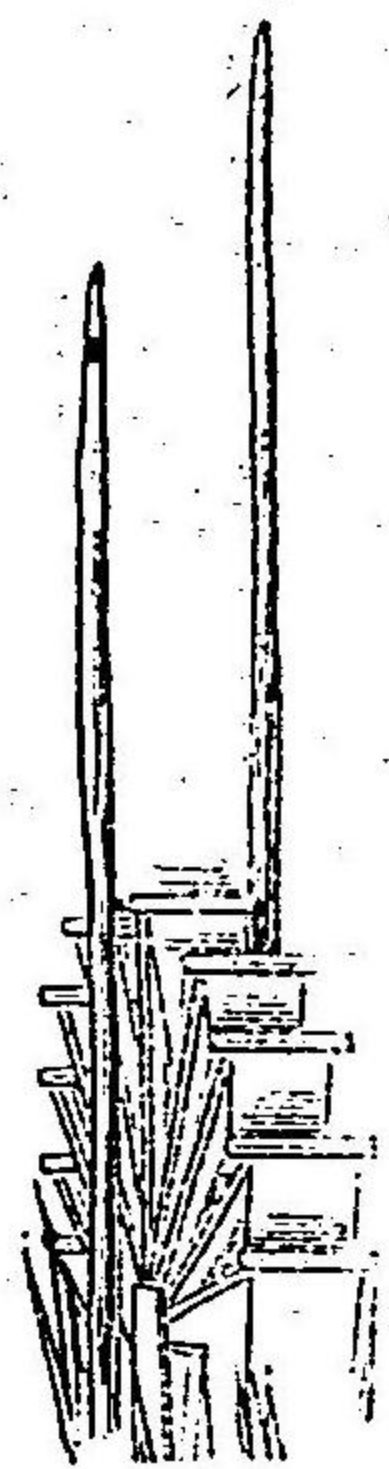
- 一、グリーンンノ自我實現説ヲ叙述シテ之ヲ批評セヨ、
- 二、道德ト經濟トノ關係ヲ論セヨ、
- 三、孔孟仁義ノ教ト楊朱爲我墨翟兼愛ノ説トヲ比較評論セヨ、
- 四、忠ノ觀念ニ於テ本邦ト支那ト相同シカラザル所アリヤ否
ヤ、若シ相同シカラザル所アリトセバ、其然ル所以ヲ説明
セヨ、
- 五、ヘーゲルノ倫理説ノ特色ヲ叙述セヨ、
- 六、善意識ノ性質ヲ論シ、且ツ青年期ニ於ケル善意識ノ特色
ヲ述ブベシ、

右三時間

注意 女子師範學校、師範學校女子部、高等女學校ノミノ
教員志願者ハ第三問ニ答フルヲ要セズ

◎同 教育科

- 一、注意ノ性質ヲ説明シ、其發達ノ過程ヲ述ベヨ。
 - 二、類推ト歸納法トノ區別ヲ、例ヲ舉ゲテ説明セヨ。
 - 三、明治維新以後ニ於ケル教育思想ノ變遷ヲ述ベヨ。
 - 四、境遇ト教育トノ關係ヲ論セヨ。
 - 五、訓練ノ意義ヲ説明シ、其主要ナル手段ヲ論セヨ。
 - 六、教科及教材ノ統合ニ關スル主要ナル說ヲ舉ゲテ之ヲ批評セヨ。
- 右四時間



▲讀者俱樂部▼

●秋

駿河 鹽川 翠松

萩の花のこぼれて居る庭に足を運んで一層強く世は秋だと感じた。自分は石に腰をかけて眼を閉じた。宇宙の絶對の主權を握つて居る神が、その思ふ儘に吾々に苦樂を感じしめる事を思ふと、何か知らん我身の小と無力とを嘆ぜざるをえない。もの皆憂ひの色ある此庭に、今から後運命は如何様に無情の針を振るか。あゝはかないは彼等の一生。斯くて彼等は亡びの日近づきつゝあるのだ。

靜かに大空を仰視ると、雲はアゲアゲにちぎれて蒼い空が見える——眼をかすめて落ちくる柳の葉を見越して。

●江村の闇

臚家 迷娥

江村の 闇の廬に
半蓋の 盞茶を啜り
詩る招く 我影瘠せて
窓に倚り焦る——

われ響く—— 響き來る歌
唯が人の 歌ふ何の歌

あなあわれ 歌とし言へば
耳立ちて、佗し——

今は早 ちらりと見えて
西に行く 小舟の笛に

歌の主 姿もわかす
節々の、悲し——

●敦盛か死期

同 人

櫻花よしその終り殊更よし。露敷く朝千點萬點紛亂て咲き誇ると雖も、時の嵐の吹き來ればけなげにも白雪と散らん。思ひ起す替ては源氏の壓力に紛黨儼しかりし平家方の敦盛か死期——。

●陽 春

今朝の華かな日射が、植込の葉末の露を斜に流して珠のよう
に煌めきながら、大椿の根方に殊つた淡雪に消え込むととろ
ろと溶けて生々した赤土の濡色が現はれた、なに何の古根か
らか二葉が伸びて居る。

●俳 句

大阪 増井 蒸風
寝れて聞く水の音にも秋近し
分別のつくまで庭の涼みかな
新鴻管根村 多賀 晚來

録 録

夕立や稻田十里風青し

雁の聲聞かれど甘し露の茄子

●河 風

臚家 迷娥

行方果敢なき人の子が、知りて願ふか榮達の、
巷に競ふ其態は——。
狂にあらすば痴の迷ひ、迷うてえたる物は何、
狂してえたる物は何。
流轉の浮世人生の、 頼もしからぬことわりは、
例へば春草若くとも、 夏に衰へ秋に瘦せ、
冬に朽ち果つ是非もなき。
時よ浮世よ命敵よ。
不圖佇立る河の端、 川風颯と地を這うて、
松の葉末に月ゆらく。

●秋の實

埼玉縣兒玉郡 櫻澤 穂浪子
若泉村大字渡瀬
秋の雲蟲の聲すらおちつかぬ
霧雨の簾の中や秋の山
朝つゆのホロ、冷たし今日の秋
散る花のあたりに風はなかりけり

●不 安

埼玉神流川畔 櫻澤 穂浪
前の林には、霧が濛く懸つて居る。

何者にまれ其の淡い霧の中に溶し込まればやまぬ、と云つた様な晩だ。

空気が、ホトリ／＼重い霧となり、静寂に暮れて行く平和の村。暗の領は、刻々廣がつて行く。

窓の風鈴が寒さうに鳴る。
天も暗い、地も暗い、
暫し、やるせなき愛憤を抱いて、書窓でホツと溜息をついた。

幻影の塀を辿る心は、ありなしの風に茫々たる野原に飛んで居る。思も何もかも野原に運ばれて、只残骸が淋しい風に吹かれて居る。

自分は此處を舞臺として一生懸命に、跳ねたり踊つたりして戦つた。

無暗になぐる。攫む斬る。衝く。ヒ、と風笛の鳴つた様な悲鳴を上げて、パツタリと後へ倒れた。

突込んだ刀を深く／＼、力委せに更に深く突込んだ。自分は戀に破れて戦に勝つたのだ。

木も草もわな／＼と微に身震ひした。忿怒の雲は晴れた。

雲は晴れても月影の宿る可き身でない。かへり見すれば、己が侵した罪は歴然として、曝されてあるのだ。

思はず、ぞつとした。嗚呼恐る可き殺人犯よ。然し敵!! よろ／＼とした。

レペリイは破れた。

《兄さん御飯よ》と涼しい妹が聲

満身の流汗は淋漓として、手には血の汗がにじんで居た。ホツと太息ついた。

悲哀と、愛憤と、暗闇とをつづけて、勞れにつかれた骸は、足もシドロモドロに、梯子段の一段にかけた。パンの要求と云ふ一の望のみ負うて!!!

●桃の舎翠峰君に謝す

曉 家 迷 蛾

一年第十五號の本欄により迷蛾に交際願はれしを、今迄何等の消息も致さず、知らぬ顔の半兵衛をきめ居り、何んとも申譯之なく候。是れとても故意ありての事にては御座なく、迷蛾近時の境遇上本意ならずも本日初めて其號を繕き候始末、必ず悪しくな思召し給ひそ。勿々。(九月十日夜認む)

●屑籠

韓國元山里 石川 齊

旅枕高麗野の夏の短夜を

ひとり寝かれてありし日ぞ偲ぶ。

七夕の今宵は旅のいたつきに

眠りも得せず聞く蟲の聲。

高麗野原しげく松蟲蟋蟀

ひぐらしをきてあゝ旅の子は。

旅枕耳歌て、聞く蟲の

音に湧き出づる涙さびしも。

●編輯室より

▲豫定の松平講師の唐宋時代文學史は、久保學士の支那文學史中に含蓄詳説することゝしたれば終に掲載せざる事となしたり。請ふ諒せよ。

▲大に讀者文藝を歓迎す。ドウデモイ、式でなく、推敲に推敲を経て而る後に送られたし假名遣ひなど最も注意を要す。ならひ以て性となればなり。

▲講義中不得心の箇處あらば容赦なくドシ／＼質問せらるべし。尤も質疑規定は必ず守らるべき事。

▲第一學年中に掲載未了の學科は、第二學年のはじめに完結となるやう力むべし。次年度の分を繰上げたものありし爲め此結果を生じたるなれば、悪しからず。

▲我が校は来る十三日始業なり。故山に英氣を養ひたる幾千の學生は、三五隊をなして懐しき校門を顧視りつゝ來往す。時正に秋冷、意氣衝天のおもひあらむ。

●稟告

新たに第二學年に進級する諸君は、豫定の通り來る四十三年九月が卒業期なり。



り。往々誤解せる者あるやにつき茲に稟告す

62
1106

▲以後當雜録は多く六號活字を用うる事としたり。要は狭きものを廣くせむとの編者の微意に外ならず。諸君が業務の餘暇に緝かむとするに當つて、眼を患ひ居らるゝ方もあらば嘸御迷惑ならむも、内容の豊富なる點に於て優に之を償うて餘りある可し。

▲「おもかげ」と題して、講師諸先生の噂やら逸話やらを集録し、讀者諸君が日々親しく指導を受くる能はざる人々の片影を、臚げながらも紙上を以て傳ふる事を將來力む可し。

▲本出版部にては今回

先哲漢籍國字解全書
遺著

と名づくる全部十二冊よりなる大部の書を豫約出版する事となりたり。其内容は

- 第一卷 孝經 (熊澤蕃山講)
- 大學、中庸、論語 (中村惕齋講)
- 第二卷 孟子 (中村惕齋講)
- 第三卷、第四卷

易經 (眞勢中州、松井羅州講)

第五卷 詩經 (中村惕齋講)

第六卷 書經 (太田錦城講)

第七卷 小學 (中村惕齋講)

第八卷 近思錄 (中村惕齋講)

第九卷 老子 (山本洞雲講) 莊子 (毛利貞齋講)

列子 (太田玄九講)

第十卷 孫子 (荻生徂徠講) 唐詩選 (服部南郭講)

第十一卷 古文眞寶前集 (楠原箕洲講)

第十二卷 古文眞寶後集 (林羅山、鶴岡石齋講)

にて豫約申込期限は本年十月三十一日限り。豫約代金は即納金拾貳圓、毎月拂一圓二十錢にて第一卷は本年十一月送本し、以下毎月一巻宛發行すといふ。漢文研究者にとりては至極便利の福音なるべし。郵送費は東京市内一冊四錢其他の内地は拾貳錢宛なり。當編輯部は悦んで之を諸君に紹介す。



62
406

早稻田大學四十二年
度
文學部第二學年講義錄

講演乃雜錄

310588-000-0

62-406

講演乃雜錄

早稻田大學 [編]